

無論高山でも眞夏の日中は相當暑いですが、冷涼な山氣が常にたちこめてゐますし、暑いといつても、それはほんの一時で、午後にはまた元の涼しさに戻りますから、彼等にはそれほど苦痛を感じないのです。これと反對に都會地の暑さときたら、晝間は無論のこと、夜の更けるまで蒸されますので、そのためにすつかり疲らされて、病氣になつたり、根腐りを起したりして、遂には枯れ果てしまふやうなことになります。

前にも申しましたやうに、高山植物は山にある時は一年の大半を休眠して過しますが、都會地でも、春は早く活動を始め、花が咲き實が成つてからも暑さのために生育を餘儀なく續けさせられるために、兎角衰弱を來たして、翌年出る芽に十分力がつかぬことになります。それではどうしたら植物の衰弱を防ぐことが出来るかと申しますと、一にそれは夏の管理如何にあるやうです。

そこで先づ一番大切なことは出来るだけ涼しくしてやることです。併し如何に涼しくしても山と同じ状態にはとても出来ませんから、その他の條件として日照時間を短縮してやつたり、通風を圖つたり、灌水などに注意して彼等の疲れを少しでも軽くするやうに努める必要があります。これを要するに夏の間は培養といふことにはあまり重きをおかずに、たゞ夏を無事に切抜けるといふことに考慮を拂はねばなりません。

### 夏越しの實際方法

ご承知のやうに、一口に山草、高山植物といつても、各々その自生地を大變異にしてゐます。日當りのよい砂地の乾燥した所に生えてゐるもの、斷崖や岩石の割れ目に根を入れて生存してゐるもの、お花畑一面に群生してゐるもの、溪谷の陰地や樹林の下などにあるもの、湖や沼の濕地にあるものなど、その生育状態は區々です。従つて都會地での取扱ひも多少異にしなればなりません。即ち一日中日蔭におくものと、午前中少し日に當て、日中の光線と西日を避けて半日蔭にしてやるものと、一日中日向に出しておいた方がよいものと、この三通りに分けることが出来ます。

次にどういふものがどういふ場所を好むか、又その取扱ひ方などを申し上げます。

**日蔭を好むもの** 一日中日蔭においた方がよいものは、樹林の下や岩陰などに生えてゐるもので、羊齒の類を初め、九輪草や櫻草の類、イハタバコ、イハギリサウ、オサバグサ、それから紅大文字草、イハナシ、アカモノなどもさうです。これ等の植物は直射日光をひどく嫌ひますから、夏は必ず日蔭に持込むか、或は棚の上に葎簾をかけてやらなければなりません。

日除にする葭簀は棚上一尺乃至一尺五寸位がよろしい。植物のためには高いほど通風が圖れて好都合ですが、あまり高いと雨が降つた時に、葭簀から落ちる雨滴のために植物を傷める處れがあります。併し葭簀をかけるのは晴天の日に限ることがあつて、曇りの時やまた雨天の時も葭簀を巻いてやり、雨にも當てた方がよろしい。特に長雨の時は必ずさうする必要があるります。又夜分も葭簀を取拂つて十分夜露を結ばしめることが大切です。

半日蔭を好むもの 半日蔭におくものは、山の中腹に生へてゐる植物で、彼等が野生してゐる所は相當日當りのよい所ですから、日光に當ることは別に差支へありません。併し暑熱には弱いものですから、都會地では一日中炎天におかずに半日蔭にしてやるべきです。大體に於て半日蔭がよいものは、山草の大部分で、山のお花畑にあるやうなものは殆んど全部と申しても差支へないでせう。

併し植物によつて暑さに對する抵抗力も異なりますから、日除の仕方本當を云へば一様には參りません。ごく暑さに弱いものは朝日が出てから一、二時間、普通のもは午前十時頃まで割合に強いものはお正午頃までとすれば理想的です。併し少しばかりの鉢數ではさう一々區別も出来ませんから、端の方には強いもの、中程には弱いものをおくやうにして大體午前十時頃まで日に當てるやうにすればよいでせう。

## 夏 盆 栽

## 夏 盆 栽

日當りがよいもの 日當りにおいた方がよいものは勿論日光にも強いが、暑さにも負けない植物です。元來山草は、あまり丈の伸びすぎたものは觀賞上面白くありませんから、葉や莖を傷めない限り、日當りのよい所で作つた方が、締つて形がよくなるのです。それで白樺、石南、姫石南、ガンカウランなどの灌木類はかうして作ります。それから鶯草、駒草、アサギリサウマウセンゴケ、ツルコケモモ、羽衣草などもさうです。

一般に丈夫な植物で全體の姿のひきしまる科味の出るものは終日日向において差支へありませんが、培養に自信がなく、又手の行届かない人は、どれもこれも全部一様に午前中少し日に當て、あとは簀下に日を避けるのが一番無難なやり方だと信じます。

何れの場合も大切なことは通風をよくすること、通風、換氣が悪く、蒸れるやうであると兎角故障を起したがるものですから、この點は特に注意を要します。

夏の管理で一番面倒であり、といつて怠ることの出来ないのは灌水です。灌水の量や回数などは植物により、置場によつて夫々異なりますから一概には申せませんが、兎に角夏は一番乾きの激しい時ですから、今までよりも餘計に與へねばなりません。要するに土の表面が稍々白く乾いた時にやるやうにすれば間違ひはありません。灌水の量は鉢底から雫がたれる位十分にやりますが、水排けが不完全ではいけません。水排けが不十分であると水がいつまで鉢の中に溜

夏 盆 栽

つてゐる鉢の中が蒸れ、根を傷め易いからです。又灌水用の水は汲立ての冷いものは避けて、しばらく甕などに汲んでおいた微温の水を使用し、細目の如露をもつて葉の頭からかけ、葉についた埃や塵を洗ひ流してやるのが肝要です。又水盤物では時々水を取換へてやらねばなりません。尚鉢の中は常に適温を保つてゐる位がよく、特に夕方になつても濕り勝ちではよくありませんから、午後の灌水は少し加減する必要があります。

肥料は大抵のものが殆んど要りません。やらぬ方が安全です。併し羊齒類などは葉色をよくするために油粕の極く薄い腐汁の與へるのはいゝことで、又姫石南なども來年の花芽を出させるために與へた方がいゝやうです。それからイハウチハ、イハカガミ、イハタバコ、ホトトギスや櫻草の類も少し與へた方がよろしい。

春から夏にかけては害虫の出る時期ですから、その驅除も仲々大切な仕事です。

あぶら蟲の場合はデリス石鹼四匁に水二升を加へたものか、リクイドならば一合に對して水四升到したもので、晴天の日を選んで撒布します。赤ダニは、灌水を強くして蟲をなるべく地面に落すやうにし、草も地も共に十分消毒します。赤ダニは藥に強いので、あぶら蟲の二倍位の藥がよろしい。ミミズには今津蠅取粉三、四匁を水一升到し、よく攪きまぜて根元へ靜かに注ぐと、暫らくしてミミズは這出して來ますから、難なく驅除出來ます。

昭和十四年七月廿五日 印刷  
昭和十四年七月廿五日 發行

夏の盆栽……奥付  
定價三十錢

編者

農業世界編輯局

發行者

東京市日本橋區本町三丁目九番地  
株式會社博文館

印刷者

大橋進一  
東京市神田區小川町二丁目六番地  
瀬尾忠雄

博文館文庫  
—(33)—



株式會社 博文館

發行所

東京市日本橋區本町三丁目  
振替貯金口座東京二四〇番  
電話日本橋(24) 代一三〇一三番(6)  
三〇三番

副印所副印舎長



394  
80

古今名局詳解	古今名局詳解	初學將棋讀本	詰將棋五十番	寄せの手筋	開戦の時機	盆栽入門	春の盆栽	夏の盆栽	秋の盆栽	冬の盆栽	小品及小物盆栽
〔享保中心篇〕	〔近代中心篇〕	建部和歌夫	塚田正夫	梶 一郎	梶 一郎	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局
土居市太郎	土居市太郎	建部和歌夫	塚田正夫	梶 一郎	梶 一郎	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

盆栽樹形寫真百鑑	萬年青と蘭	棕栢竹と観音竹	大菊の作り方	小菊の盆栽	朝顔の作り方	草花二百種の作り方	苺の作り方	鶏の飼ひ方	兎の飼ひ方
農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局	農業世界編輯局
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

【以下續刊】

□送料 定價三十五錢迄は……三錢  
 定價四十錢以上は……六錢  
 □御註文は定價に送料を加へ、總て前金で御送り下さい。

終

